



IBJ防除情報

(*は、Ishihara Bioscience Japan=石原バイオサイエンスの略)

第10号



新しい農業です

新農薬情報

ハダニをガブリッ！天敵殺虫剤

生物農薬「石原チリガブリ」について



チリガブリは、農作物を加害するハダニ類だけをエサとする、天敵のチリカブリダニです。環境や人、動植物に影響を与えることなく、安定してハダニ類の発生を抑えます。

○ハダニ類のみをエサとする天敵生物

農作物を加害するハダニ類(ナミハダニ、カンザワハダニ等)のみを捕食するので、農作物に影響を与えることなく、ハダニを防除できます。

○高い捕食能力と増殖能力を合わせ持つ

他のハダニ類の天敵に比べて高い捕食能力と増殖能力を合わせ持ちます。

○薬剤抵抗性の発達したハダニ類にも有効

天敵生物なので、薬剤抵抗性の発達したハダニ類にも有効です。また、使用によって薬剤抵抗性が発達するおそれはありません。

○人や環境にやさしい生物農薬

環境に対する影響や人、動植物へ影響はなく、安心してご使用頂けます。

○JAS法に適合

JAS法が定める有機農産物、または特別栽培農産物にも使用可能です。

○IPMプログラムを牽引

ハダニ類の発生が多い施設栽培においては、有効な薬剤と組み合わせることで、化学農薬の使用回数軽減や環境負荷の軽減に貢献します。

ハダニにカブリつく「チリガブリ」



適用害虫と使用方法

作物名	適用害虫名	使用量(10a当り)	使用時期	使用方法	総使用回数*
野菜類(施設栽培) ばら(施設栽培)	ハダニ類	4,000~6,000頭	発生初期	放飼	—

* 本剤およびチリカブリダニを含む農薬の総使用回数

上手な使い方



容器1本当り30ml(2,000頭)入り

1

容器を横にして5~6回程度ゆっくりと回転させます。

2

少量に分けて放飼をします。(1振り当り約10頭が放飼されます。)

3

フタを開けたまま株間に数日置きます。(放飼直後は容器内にチリカブリダニが残っています。それらをすべて圃場に移動させます。)

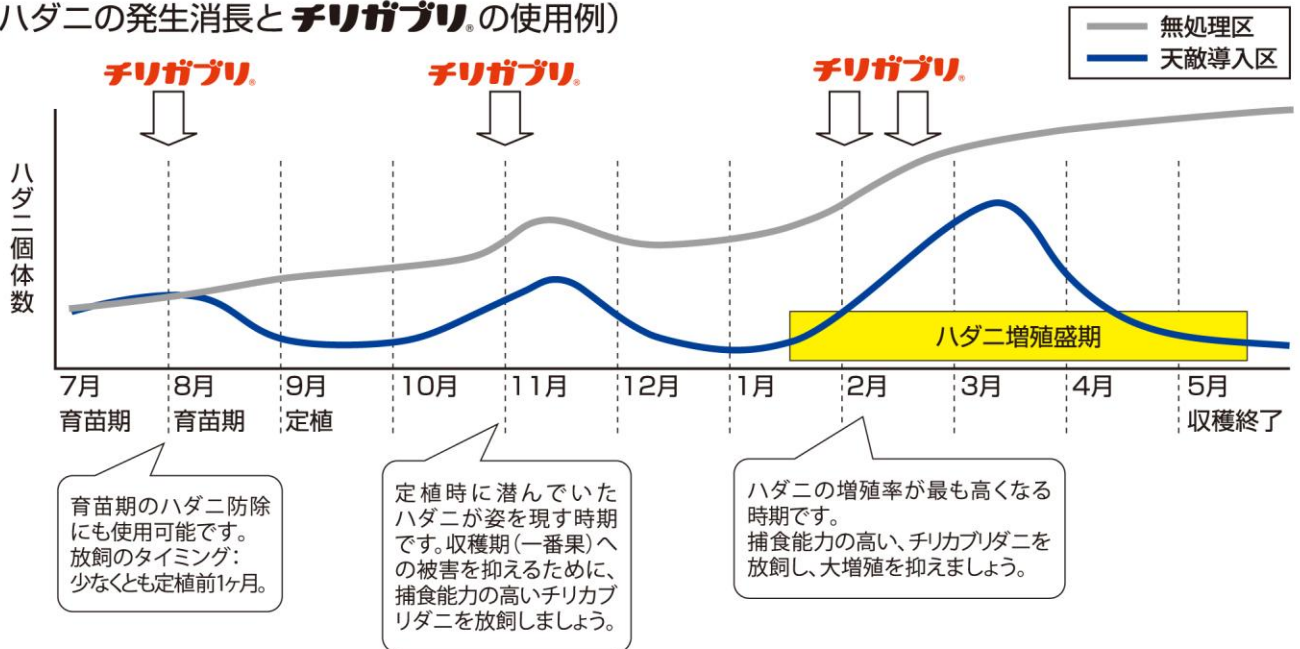
10アール当り2~3ボトルを使用してください。1ボトル当り約200回振ると、全頭放飼されますよ。

《使用時期》

- ・生存日数が短いので、入手後直ちに使用し、使いきってください。
- ・ハダニの発生初期に放飼してください。
- ・ハダニの発生している箇所へ多めに放飼すると、より効果的です。
- ・放飼前日までに、アカリタッチ乳剤等の気門封鎖型の殺ダニ剤(チリカブリダニに影響のない薬剤)を散布し、ハダニの密度を下げておくと防除効果が高まります。
- ・放飼から3日間は、農薬(チリカブリダニに影響の無い農薬も含めて)の散布は控えてください。

いちご(施設栽培)でのおすすめ使用時期は3時期!

(ハダニの発生消長とチリガブリの使用例)



ご説明
します。

どんなこと?どういう意味?(用語解説)

「カブリダニ」とは

「カブリダニ」は、植物上に生息する捕食性のダニである。

ハダニ、フシダニ、アザミウマなどの農業害虫の天敵として知られ、現在迄にいくつかの種(代表的なものの一つが、ハダニを対象としたチリカブリダニ。)が大量増殖され、日本国内でも天敵農薬として広く利用されている。

語源は「齧り」(「かじり」ではなく、「かぶり」)で、芝居の「かぶり付き」、「ご馳走にかぶりつく」の様に使われる。

その捕食する様子から名付けられたと考えられる。

天敵農薬としてカブリダニを使いこなすには、IPM(総合的病害虫管理)の考え方に従った防除体系を組む必要がある。折角放飼したカブリダニが他の病害虫の防除で殺されない様、農薬を使用する場合には、剤・時期等に充分に気をつける必要がある。

「生物農薬」とは

一般的には、**農薬としての目的で利用される生きた生物**をいう。

生物としては、昆虫、線虫、菌類などが中心である。**特に天敵を利用する場合を天敵農薬、微生物を利用する場合を微生物農薬と**いうことがある。(化学農薬の中には生物由来の物質(抗生物質、毒素等)も有り、広義では、こうしたものも含めて生物農薬と言う場合もある。弊社のトアロー水和剤CT・同フロアブルCTは、BT菌由来の毒素を製剤化したもので、これに当たる。)

種類にもよるが生きた生物である為、化学農薬(一般的に言う所の農薬)と比べて一般的に次の様な違いがある。

- ・有効期限が短い。(特に昆虫類は短い。)
- ・化学農薬との併用が不可、または限定的である。また化学農薬と生物農薬の散布の間隔を広くあける必要がある。(化学農薬で生物農薬が死滅するのを回避する為。)
- ・ビニールハウスなどの閉じた空間で利用することが多い。(特に昆虫類は逃げる為。)
- ・有機農法でも使うことができる。
- ・対象となる害虫、病気、雑草が限定的である。
- ・人畜や環境に対して安全性が高い。ただし外来生物を利用した生物農薬は、周辺の生態系への影響が懸念されている。
- ・化学農薬は同一のものを繰り返し散布すると、害虫や病原菌に抵抗性が生じることが多い。しかし、生物農薬の場合、抵抗性が生じることが少なく、むしろ生物農薬で使われる生物の密度が高くなって効果が高くなるが多い。

法律上の位置付け

生物農薬も化学農薬と同様に農薬取締法で規制される。但し、化学農薬に比べると安全性が高い(作物残留、環境安全性等)為、登録要件となる試験項目が少なく済む(毒性試験他が不要になる)。



ISK 石原バイオサイエンス株式会社 本社 普及部
〒112-0004 東京都文京区後楽1丁目4番14号
TEL 03-5844-6320 FAX03-3812-6548

ホームページ アドレス <http://www.iskweb.co.jp/ibj/>